

パリの日々

山中篤太郎<sup>\*</sup>

わたしは、昭和7年の暮から11年の春先にかけて正味3年半ほどをフランスのパリで過ごしています。ヒットラー政権が生れてヨーロッパの天地が次第に暗くかげりかけ、日本の国際連盟脱退等も起った頃にあたり、おまけに、文部省の留学生ではなく、外務省の肝煎りで今の共同通信社の前身、新聞聯合社パリ特派員という肩書で送り出されていたのです。

しかし、一皮むけば、帰国後に元通り大学に戻るという条件の特派員で、わたし個人としては、渡欧前に一応公刊したイギリスの団結権史の研究に続くフランス団結権史研究が渡仏の主要目標だったわけですので、いわば二足の草鞋をはいていたようなものでした。二足の草鞋も多少風変わりでしたが、経済学畠といえば、英独留学ときまっていた当時、人目にはパリ留学そのものも風変りにうつったようでした。

こうした事情のために、わたしのパリには二つの違った「根拠地」ができる結果になっているのです。

その一つはむろんパリ特派員としての根拠地です。パリのまんまん中に華麗なオペラ座を中心にするオペラ広場があります。ここからの放射線上の通りの一つ、東に向っているのがキャトル・セプタンプル街、これを五ブロック程歩くと株式取引所のある取引所広場です。円柱を立ち並べた取引所と向いあうように、古びた建物をつぎ合せたフランスの代表的通信社アヴァスの薄汚れた社屋があり、その中の一室、チェコやハンガリー以下当時小協商国と呼ばれた東欧諸国の特派員諸君と机を並べた共同の小部屋が、特派員たる私にあてがわれた根拠地だったのです。原則として、平日は一度は必ずここに顔を出して記者仕事をしたものです。しかし、新聞メ切り時間の極東との時差の関係で、仕事は大体午前中ですんだものです。字儀通り新米のプレス・マンでしたが、半年もしたら、午後はかなり自由に時間が使えるようになったものです。つまり「研究者としての己れ」につかう時間です。

研究者としてのわたしは、始めから例えば大学に藉をおくといった考えはなかつ

<sup>\*</sup> やまなか とくたろう 一橋大学名誉教授

たのです。フランス団結権史研究のための資料、とくに立法についての一次資料を手に入れることが目当てでしたから、渡仏前からカタログ等で知っていた古本屋漁りが最大の関心事でした。しかも、誰でもが欲しがるといえるような社会経済の基本古典の蒐集とは違って、かなり特殊な資料漁りですので、これには、中々時間と根気がいられます。カルティエ・ラタンの大きい古本屋を見廻ったある日、昨日日本のギャルソンが一人買いに来た、と番頭の噂話をきいたあとで、それが神戸大学の田中金司教授とわかり、日本の教授もパリではギャルソンなのか、それともギャルソンといわれるほど田中教授は若々しかったのか、と途まどった思い出もあります。しかし、在仏中、一番頻繁（というよりむしろ定期的）に通ったのは、サン・スルピス寺院（？）に近いマルセル・リビュール書店でした。ここは新刊も出版する社会科学系統の古書店だったからです。何しろ特殊な資料漁りのことですから、しまいには、リビュール老人が、あげましようよ、といってただでくれるものがあったほど顔馴染になったものです。時には、じめじめした地下倉庫の古本の山のなかまでいりこんだこともあり、訪ねるたびに買った本は、包みとして仮寓までハンサムな息子さんが届けてくれたものです。先年久々にパリを訪れた時、態々時間をつくって尋ねて見ましたが、移転してい、思い出の店先きに再会できなかったのは残念でした。

しかし、とくにわたしが欲しかったのは、立法の歩みを示す上で欠くことのできない国会討議の資料でした。これをのせている著書はあまりないのが当然でしたから、著書としての値打ちは少くとも、そんな記載のある書物にぶつかるとひどくうれしかったものです。法律の方では古典的出版物に属するダロツ・ジュリスプルーダンス・ジェネラルの1864年分の端本を見つけた時の如きはその好例でした。那翁三世のストライキ法案を国会で提出討議している記録がまるまる出ていたからです。戦争中僅かばかり疎開に出した図書のうちにもいれたくらいです。

フランス団結権史の大きな山は、フランス革命期をのぞくと、とくに、1864年と84年、あと第一次大戦後ですので、この戦後の国会記録は、官報販売所で残本を買入れることができました。その時偶々1890年代の分もあるのをカタログで見付け、これまた助かったと思ったものです。尤も、塵にまみれた古い官報を梯子にのぼって上の棚から探し出す販売係りの顔付きはあまりさえたものでなかったことと、40年余も前の印刷物で「古本」でなく買えるフランス社会のある「厚み」のようなものに感心したことを覚えています。

しかし、あとの1800年代についての立法資料はゼロックスもない当時、ことにいろいろな日時に分散して記載されている討議資料は一々原資料についてたしかめてみる以外の手はなかったわけです。覚悟をきめて図書館通いにとりかかったのは、パリ滞在期間も後半になってでした。

日本でいうと幕末、明初の変乱期に当り、フランスでも那翁三世時代から第三共和制の初期に当るこれも相当な変動の山場の時期についての資料漁りになりましたから、図書館で古い官報を調べて行くうちに肝心なこと以外に印象をのこす出来事もありました。たしか1872年頃の官報でしたか、毎号簡単な彙報欄があり、日本の越中島で皇帝が始めて洋式の観兵式を行ったという記事にぶつかりました。丁度これを読んだ頃、イタリーのムッソリーニがエチオピア戦争を始めた当時で、町のニュース映画で素足の近衛兵をエチオピア皇帝が閲兵している姿を見るなどしていたところなので、エチオピアというフランスでも知られていない未開の一社会を眺める人々の姿勢が十九世紀半ば過ぎの日本に対してとられていたのを文外に感じとり、時をへだてたある哀れさに似た印象をうけたものでした。

取引所広場でキャトル・セプタムブル街と交錯するヴィヴィエンス街を四ブロック程南下するとフランス中央銀行の付近に出ます。東京の兜町に有楽町をつけたようなアヴァス界限ですからフランス銀行があってもおかしくはないのですが、実は古い官報を見に通った国立図書館<sup>ビブリアーグ・ナショナル</sup>の二階建の荘厳な建物は、フランス銀行に辿りつく途中、このヴィヴィエンス街に裏側を見せて建っているのです。

この図書館は遠く1373年王宮内に900部程で作られたのが始まりで、ヴィヴィエンス街に1666年に移され、その後1721年現在位置の建物にうつり、フランス革命後更に規模をひろげた世界で有数な図書館です。その蔵書の豊富さでは、1916年既に定期刊物を除く図書だけで320万部をこえたといわれます。外国人でもその国の大使からの推薦状をそえ書面で請求すれば閲覧許可証がもらえます。

リッシュリュエ街に面する正面入口をはいったすぐ右が大きな一般閲覧室、入口の奥にサル・オヴァール（名前の通り卵型のこれまたかなり大きな部屋）があります。バック・ナンバーの定期刊物専門の部屋なのです。だから、古い国会速記録目当てのわたしの「場」はサル・オヴァールだったわけです。そしてまた、その故に、ここに研究者としてのわたしの根拠地が生れることにもなったのです。

というのは、一般閲覧室と違い、サル・オヴァールの方は至って閑散なのです。数をたしかめたことはなかったが、多くて10人止まりの閲覧者が広い部屋に散らばって読んでいます。そして、貸出し台の老嬢(?)をいれて、書庫から書物の出し入れしてくれる老人数人、つまり図書館の係りの方が人数が多い位で、サービスも贅沢なら雰囲気もひっそりと落ち着いていました。

更に贅沢なことに、わたしの場合のごとき、読む部分は一々現物を手にしてからでないと分らないので、一度に15、6冊もまとめて借りるのです。むろんその日のうちに片付けきれない場合が少くありません。その場合は、一度借りだした書物は

用がすむまで、別に特約の貸切り席になっているわけでもないのに、勝手にきめた使用中の机に何日でも借り放しにしておけるのです。資料出し入れの手数も考えての措置だったのでしょうが、わたしにとっては、宛かも、己れに特権の場所を与えられたような感じでした。静かな環境に恵まれたこの閲覧室は、電話と人声のたえない小さなアヴァスの一室とは、まこと天地を異にした第二のわたしの根拠地になったのです。この根拠地の空気は「どう、どの位進みましたか」と本の出し入れに言葉をかけてくれるほど顔馴染みになった老人の髭面と一緒に、今もほのかに頭の中に浮びます。と同時に、今のわたしにとって、夢中になって毎日を資料漁りに暮しえた若かったパリの日のわたし自身がほのかな寂寥の念で思い返されることも、残念ながら、おさえられないようです。

(1974年9月)

好評発売中!!

## アムステルダム国際社会史研究所 所報

Bulletin of the  
International Institute of Social History

Bd. 1-10 (alles Erschienen). Leiden 1937-1955. Nachdruck in 9  
Bdn. 1974 (Auvermann, Glashütten i. T.) ¥144,500

1975年完結!!

ドイツ社会民主党機関誌

## Die Neue Zeit

Wochenschrift der Deutschen Sozialdemokratie

Redigiert von K. Kautsky und H. Cunow. Jg. 1-41 Bd. II, Heft 1-10. Berlin  
1883-25. August 1923 Nachdruck 1971-1975 in 74  
Leinenbänden. (D. Auvermann, Glashütten i. T.)  
(全巻 74 Bde. Zusammen ¥1,445,000)

既刊/在庫 Jg. 1-31. 1883-1913. in 54 Bdn. ¥1,290,600  
Jg. 1-8. je Bd. je Jg. ¥21,600  
Jg. 9-31. je Jg. in 2 Bdn. je Jg. ¥49,200

日本総代理店

**極東書店**

東京・神保町 2-2  
電話 (03) 265-7531